第48回学生懸賞論文審査結果

2020年10月23日を締切とした第48回学生懸賞論文には、35編の応募がありました。そのうち、審査基準を満たした34編について、審査委員会で協議した結果、最優秀賞は該当無し、優秀賞1編、審査員奨励賞1編が選定されました。

■最優秀賞　0編
該当なし

■優秀賞　1編
「多文化教育が抱える問題点 ― インターナショナルスクールを事例に ― 」
国際教養学部言語文化学科2年 参田 沙良（さんだ・さら）

■審査員奨励賞　1編
「フィリピンにおける義務教育のドロップアウト削減にむけた提案」
経済学部経営学科3年 佐野 寿來（さの・じゅらい）

審査講評

まずは、審査委員一同、応募したすべてのみなさんに敬意と感謝を表したく思います。今年度（第48回）学生懸賞論文募集に際しては、昨今の社会情勢によって研究・学習活動が制限されていることをふまえ、「自由課題」といたしました。その結果、昨年よりも多くの応募があり、さまざまな分野・論点の論文が出揃いました。

審査の過程では、各審査委員が8−9編ずつ査読し（第1次審査）、そこで推薦されたすべての論文を審査員全員で査読（第2次審査）しました。事前に発表された審査基準をもとに、問題設定の明確さ、論旨の一貫性、先行研究やデータの適切な使用、調査方法の工夫、結論の妥当性、さらに研究の将来性や独創性など、様々な角度から検討し、厳正な審査の結果、最優秀賞0編、優秀賞1編、審査員奨励賞1編が選ばれました。

全体的な傾向について、審査員からの指摘はおおよそ2点に集約されます。ひとつは、引用資料・データや参考文献、先行研究などを、効果的に扱いきれていない論文が多かったこと。もうひとつは、定型的な（パターン化された）展開・書き方が一部の応募者のあいだに垣間見られたことです。程度の差はあれ、多くの論文にそういった傾向があったため、残念ながら今年度は最優秀賞に値する論文はありませんでした。

そのなかで優秀賞に選定された「多文化教育が抱える問題点−インターナショナルスクールを事例に−」については、自らの経験をふまえて、独自の調査を試み、多文化共生を推進する学校教育に対しクリティカルな視点で切り込んでいる点が、審査員からは高く評価されました。ただし、インタビュー事例の数や先行研究の掘り下げ方が不十分であり、やや主観的な展開になっている印象も否めず、最優秀賞には届きませんでした。今後、同じテーマを追っていくならば、そういった点を検討していただきたいです。

審査員奨励賞の「フィリピンにおける義務教育のドロップアウト削減にむけた提案」は、フィリピンの貧困家庭に育つ子どもたちの就学を支援する取り組み（使用済みプラスチックと給食・学費との交換）を、社会的・経済的背景をふまえて紹介・推奨した論文です。多くの資料がうまく整理され、着眼点の良さが評価された一方、インターネットから入手できる情報や公的データに偏重し、自らが入手した情報、独自の展開や提案、既存の取り組みへの批判的な視点も不十分であることから、入賞にはいたりませんでした。自身の経験や考えをもっと積極的に出していく姿勢があると、より臨場感のある論文になったかもしれません。ぜひとも継続的にこの問題にかかわっていってほしいと願います。

最終審査に残らなかった論文のなかにも、テーマ設定や着眼点、独自性、大学生らしさといった点においてキラリと光る論文がいくつかありました。人種差別問題をとりあげた論文は難しいテーマ設定にもかかわらず果敢に取り組んでいる姿勢がみられました。ラテン語学習と英語習得との関連性を論じた論文では、先行研究の整理が丁寧になされており、今後の発展が楽しみです。このほか、芸術・芸能に関するテーマや、昨今の世情に切り込んだ理論的研究もあり、学生諸氏の研究関心・研究方法の多様性をあらためて感じることができました。具体的な解決方法や単純な結論づけが困難な論題に対し、臆することなく挑む意欲に、審査員一同、心からの拍手を送ります。人文知を軽視し、難解な問いが敬遠される今こそ、そういった論題を探求することの大切さを感じずにはいられません。応募してくださったみなさんには、今後の研鑽を期待しますと同時に、来年度も懸賞論文にチャレンジしていただきたいと願います。

第48回学生懸賞論文審査委員
委員長　岡村 圭子（国際教養学部教授）　委　員　廣田 愛理（外国語学部准教授）
委　員　内倉 滋（経済学部教授）　委　員　大藤 紀子（法学部教授）

●優秀賞

多文化教育が抱える問題点 ―インターナショナルスクールを事例に―

国際教養学部
言語文化学科2年
参田 沙良

インターナショナルスクールでは多国籍な生徒が在籍しているため、多文化教育が積極的に行われている。多文化教育の目標の一つとして、文化的な差異を自覚することが掲げられている。しかし実際に学校で導入されている多文化教育は、国際交流イベントといった異文化間の差異に重きが置かれている場合が多い。そのため、「文化の内なる差異」を見過ごす傾向にあるという問題点が指摘されている。

本稿では多文化教育が抱えている問題点が、インターナショナルスクールにおける「異民族間の差異」に対しては寛容になり、「内なる差異」に対しては厳しく対応をする、特殊な排除の構造を作り上げることにどれほど関与しているかを分析する。

●審査員奨励賞

フィリピンにおける義務教育のドロップアウト削減にむけた提案

経済学部
経営学科3年
佐野 寿來

フィリピンは近年、急激な経済成長を見せている。THE WORLD BANK によると、2019年度のフィリピンの一人あたりのGDPは約3,337.7 米ドルまで上昇している。しかし、急速に成長を見せていたフィリピンの経済であるが、実際にはその影響が国民の資産には反映されていないのが現状である。たとえ、どんなに経済が上向いたとしても、貧困層は貧しいまま、貧富の格差はなくならないということである。少しでも貧困層の人たちが今生活している水準よりも高い水準で生活してほしいと筆者は考えている。本稿では、フィリピンにおける義務教育のドロップアウト削減にむけた提案をする。本稿の構成は以下の通りである。第2節ではまず、フィリピンの貧困と教育の現状について明らかにする。次に第3節では、フィリピンにおける貧困層のドロップアウトの要因と問題点について述べる。そして第4節では貧困層に対しての給食支援サービス普及の提案をして、第5節で本稿の結びとする。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のために

新型コロナウイルス感染症は、現時点で収束の見込みが立っていません。このような状況下ではありますが、本学の新学期の授業は対面で実施することを基本とし、集団感染のリスクを極力低減する取り組みを行った上で実施する予定です。

昨年来、感染対策の基本的な部分は変わっていません。「日常生活ではマスクを着用する」、「手洗い、うがい、消毒をこまめに行う」、「三つの『密』（密閉、密集、密接）を避ける」といった取り組みを継続することが、自身の感染の抑止力となり、ひいては感染拡大の防止にもつながります。

在学生の皆さんが安心して通学し、授業を受けるためには、学内の全ての人が感染対策を徹底することが求められます。今冬を乗り切り、皆で健康に新学期を迎えられるよう、一人ひとりが意識して感染拡大防止に取り組みましょう。